

「地方と全国をつなぎ役になれ」

司 馬遼太郎の代表作で
スペシャルドラマとして放送されている
『坂の上の雲』*1。

3人の主人公が生まれ育った松山市では
ドラマを通じてNHKに対する関心も
高まっています。

地方の放送局に地域の人たちは
どのようなことを期待しているのでしょうか。

主人公の一人・正岡子規の記念博物館館長で、
松山放送局番組審議委員長の
竹田美喜氏に聞きました。



竹田 美喜 子規記念博物館館長

プロフィール

1946年生まれ。大阪市立大学修士課程修了後、高校で教鞭を執る。博物館協議委員を経て2007年から正岡子規の俳句などを展示した子規博物館館長。正岡子規をメインにふるさと松山についての講演を精力的にこなす。専門は万葉集や日本書紀の研究。松山放送局の番組審議委員長も務めている。

『坂の上の雲』で高まる関心

もともと経済界の方は『坂の上の雲』を読んでいる方が多いのですが、子規記念博物館*2の館長をしている私にも現役の経済界のトップの方々から講演会を依頼される機会が多くなりました。経済界の方々には秋山好古、真之兄弟のファンが多いのですが、『坂の上の雲』が3年間の放送をされる事で、正岡子規に興味を持つ層が広がってきております。これは、子規役で熱演された俳優、香川照之さんの影響が大きいと思います。NHKの放映がきっかけとなり、子規や、真之のことを実は知らなかったのだということに気づき、子規や好古、真之兄弟の再発見ブームが起きています。それぞれの人生観や生き方、友情のあり方や、明治時代の松山などへの関心が高まってまいります。

『坂の上の雲』では、子規と秋山真之の友情、子規と夏目漱石の友情、また、子規や真之が育った松山が描かれています。明治維新の負け組中の負け組であった松山藩は地を這うような苦しみの中で、何とか青年たちを東京へ送り出し、松山藩の名を上げていきたいという「野心」がありました。『坂の上の雲』の中では、真之や好古が、松山の名を上げるだけでなく、日本を救うために、世界に視野を向けていく過程が描かれています。今薄れている、気概とか気迫、目的意識、そういうものに賭ける若さや青春、それを正面切って語っております。



子規堂

現実に生きていた青年達を描いていますので、参考になる部分が多いようです。だから、企業の他にも学会や各種団体などが、松山で全国大会やシンポジウムを開くことが増えてきているのだと思います。

どのように地元活性化につながっているか

松山はもともと観光で成り立っている都市なのですが、放映のおかげで、不況の中でも観光客が増えております。その観光客をターゲットとした、『坂の上の雲』関係の土産物の販売が増えたことが目立っています。しかし、現在の観光の活況は、放映ブームによる一時的な活性化だということにも気づいており、冷静に受け止めているところはあります。『坂の上の雲』が、いよいよ3年目に入りますが、このブームをどのように定着させ、リピーターを多く作るか、今年は、勝負の年だと思います。

愛媛や松山の人が、子規や真之や好古を再発見する助けとなったのは、ドラマとは別にNHKの松山放送局が子規に関するさまざまな逸話をローカルの番組として流してくれたことです。たとえば、好古の場合は、戦場からの手紙

や新資料などから、家庭人好古像



松山城© woinary

に迫り、真之の場合は、子規に宛てた自筆の書簡6通の公開、子規の場合は、子規の母・八重さんや妹・律さんの写真、あるいは身の回りのものを正岡家子孫の協力や専門家の協力で公開したりと、今までとは違う新たな子規像を読み解いていくものが次々と放映されて、視聴者のモチベーションをあ

げていきました。放映のための導入が良くされていたと思います。子規庵の庭の再現や解説などもありましたね。それらはすべて四国版ではありますが、斬新かつ客観的で、司馬遼太郎の解釈とは別の、NHK松山局の「実録・坂の上の雲」ともいえる見ごたえのある番組でした。これらの放送は一面的に子規や真之、好古を見るのではなく多面的に見られるように工夫をしていたと思います。

——ブームが去ったとしても地域の心に残りますか。

そう思います。子規が中退した松山中学校（今の松山東高校）は2年前に創立130周年を迎えました。真之も学び、漱石が教壇に立った学校です。私は学校関係者から呼ばれて子規の話をさせていただきました。学校側は生徒に知らせたいと思い、生徒たちは知りたいと思っていることがひしひしと伝わりました。

学校には子規が政談演説をした明教館も残っています。談心会（演説をする会）、これは自由民権運動の論客であった初代松山中学校長が、生徒たちの弁論術を鍛えるために作った会ですが、子規もこの会に属し、演説を熱心に行っていました。

松山という地域は小さいので、政談演説をしたところや、子規の育った家（再現）なども残っており、映像にしているただくと頭の中でひとつに繋がっていきます。そういう番組を地元は歓迎しましたし、真摯に取り組んでもらったと思います。一つの観光地域としてのブームが去ったとしても、子規、秋山兄弟についての理解や地元を理解することにしっかりと繋がっていくと思います。

※1 「坂の上の雲」
P 88 参照

※2 「子規記念博物館」
松山市にある正岡子規の
記念博物館。およそ6万
点の実物資料や書籍を収
蔵。

地元局が制作する番組の意義

松山放送局で制作・全国放送されている『俳句王国』※3という番組があります。BS2で実に20年間放送されましたが、その結果、松山に日本各地の著名な俳人が集まり、トップの俳人が松山に来る「松山詣で」ともいえる現象が20年も続いております。それが「伊賀上野と言えば芭蕉、松山と言えば子規」「俳句王国松山」とインプットされて視聴者の方々に全国発信されています。

昨年の番組再編成の情報があつたとき、『俳句王国』が消えるのではないかと懸念を持ちまして、残して欲しいということ番組審議会で申し上げていました。NHKの会長が地方の意見も聞いてくださる会がありました。NHKにも申し上げたりしました。おかげさまで、継続されて、Eテレで放映されております。53分から25分に短縮されましたけれども、教育テレビに移ったことでBSが見られない方も平等に見ていただくチャンスが増えました。『俳句王国』が、発展的に次の段階に上がったと喜んでおります。

—— 地方局で制作し全国放送するにはそのような意味合いもあるのですか。

『俳句王国』の収録の時には、俳句の著名な先生方に、松山に来ていただかなければなりません。それが、いいと思います。東京のスタジオでの収録とはまったく違うと思います。松山城を見る。ちんちん電車が走るのんびりした風景を見る。子規が育った松山で空気を吸う。高浜虚子も河東碧梧桐もここで育ったのだと感じる。俳人はみんな何かしら子規の流れにありますから、子規たちが空気を吸った明治の松山に、皮膚感覚が回帰していくのじゃないかと私

は思います。

今では俳句ファンの方々が松山といえばワクワクしてくださり、子規博物館を訪れてくださいます。『俳句王国』が、20年間継続されたことの影響力は計り知れないものがあります。『俳句王国』は、NHKだからこそできる贅沢な番組作り、地方発信の、全国をうならせる質の高い番組作り、地方局の実力を培う見本の番組だと思えます。

—— 東京から見ているとどこで制作しても同じと考えてしまいますが。

地方の松山で作っていることが大事なのです。地方に人を集め全国に発信する。『俳句王国』20年の歴史は地方発信の先鞭だと思えます。この放送制作を東京に持つていき誰かが主宰となつて行かう句会では全く面白くなくなると思えます。単なる短歌・俳句などの講座になつてしまふでしょう。

松山で公開放送ともなると地元の人や東京の方も来られます。松山で「句会」の全国大会をやるということにもなります。『龍馬伝』や『坂の上の雲』などの番組が作り出すブームは、いわば一過性の

色彩が強いものだということが今までの経験で分かりますが、『俳句王国』はずっと松山で培われ育つてきました。そういう意味で『俳句王国』は大変な地域貢献をしているといえます。



※3 「俳句王国」
1991年からNHK松山放送局が制作する教養番組。俳句会を代表する俳人をゲストに、「テレビ句会」を演出している。

東京と地方の構図は古い

NHKの放送には中央からの発信が大事という発想がありますよね。中央が決めたことが偉くて、開発する技術も東京にあつて、街並みも銀座が一番。番組でも中央からの啓発、伝達とか、東京から地方に下ろすという構図が主だと思えます。しかし、そういう構図はもう時代遅れだと思います。地方にも全国放送に通用する、地域に育っている特性があるという発想を持つてほしい。中央と地方は今や綿密に繋がっているのです。

たとえば東日本であれだけの震災が起きたら、いま現実には車が作れない、紙が作れない。実は地方に大事なものがたくさんあつたのだということが明らかになってきました。東日本が止まったことで世界の貿易にも影響が広がっていますよね。

同じことが実は放送界にも起きるのではないか。地方局にも素晴らしい番組作りのスタッフがいる。地方の特性は地方にしか分からない。それぞれ各地の素晴らしい特性を番組化できるのは地方の人材です。中央から地方の現状を左右できると思うのは、それこそ机上の空論でしょう。先に紹介した『坂の上の雲』のプレ番組として、松山局が制作した番組などは、全国放送して欲しいと思う番組でした。

たとえば、想定外の事故を想定内のこととして、無事に地球に帰還した「はやぶさ」が、大きなニュースになりましたが、その大事な部品は愛媛県で作られていたという報道がありました。そういう日本を代表する仕事との繋がりを伝える報道は、地方の人を大変勇気づけます。部品を集めて製品化する企業は確かに中央に集まりますが、それが各地の日本人の英知によって作られていることをもつと地

方の人に知らせてほしいと思います。それはNHKの得意とするところでしようし、NHKの地方局のますますの発信力に期待するところです。

インタビューを聞いて

全国放送と地域放送は「車の両輪」という言葉がしばしばNHKでは使われてきました。しかし、「両輪」が持つ意味について、深く議論されたことはありません。地方局で全国放送の番組を制作し続けることが果たしている役割や、地域と全国、そして世界がつながっていることを紹介することも、公共放送の「両輪の軸」として評価されて良いのではと感じました。

報告 中央組織部長 米原達生